

フンボルトから『アラモ』まで

―ラテンアメリカをめぐる歴史実践の系譜と新自由主義

安 村 直 己

はじめに「ロストリバーデルタ」という謎

歴史という語には、過去における出来事の継起―総体を指す場合と、現在の視点から過去に起きたとされる出来事を再構成し、表象する行為、さらにはその表象を読み解く行為を指す場合の、少なくとも二つの用法が存在する。保莉実の用語を借りるならば、後者を歴史実践と呼び、狭義の歴史と区別することが可能となる。この用語を通じて保莉は、歴史実践という行為が、時代、地域、文化をこえて日常生活の隅々にまで及んでいることを強調したのである。^①

歴史実践の遍在性の実例として、東京デイズニーランドをとりあげることにしよう。東京デイズニーランドが、デイズニー映画のキャラクターとストーリー、米国建国の歴史、世界のミニチュア展示、そして技術革新のもたらす明るい未来ないしはフロンティアとしての宇宙のイメージという四つの柱によって構成された人工的な構築物であることに、異論はないだろう。その作り手は、米国の歴史における特定の出来事を選択・配列し、世界の現在、さらには未来と接続させながら表象しようと

する。東京デイズニーランドを訪れるという行為は、こうした作り手の歴史実践を細部と全体において受け止めながら―どの程度自覚的なのかはここでは問わない―、それを起点として新たな物語を紡ぎ出すという、二重の意味での歴史実践なのだ。歴史実践においては、メッセージの発信者と受信者の境界は相対的であり、両者の立場はしばしば入れ替わる。

ここで留意すべきは、歴史実践の遍在性はそれらの間の均質性を意味しないという点である。メッセージの内容と形態、伝達的手段、発信者と受信者の関係は、事実の継起―総体としての歴史によって規定され、変化する。議論が煩雑になるのを避けるために、発信者の戦略に限定して見ておこう。たとえば二〇〇一年に開業した東京デイズニーシーでは、東京デイズニーランドとは異なる発想が随所に採用されているが、なかでも奇妙なのが、デイズニーランドを理念的に支える四つの柱では説明のつかない、「中央アメリカの失われた古代文明」の遺跡を再現したとされるロストリバーデルタというテーマパークである。この「古代

文明」が、スペインによる征服以前、メキシコ東南部から中米諸国にかけて独自の発展を遂げたマヤ文明を指していることは明らかである。この遺跡で一九三〇年代に繰り広げられる冒険―これがデイズニー映画と関係のないことは、他社の製作した『インディ・ジョーンズ』シリーズに依拠していることからもうかがわれる―をモチーフとしたアトラクションが、世界中から移民を受け入れてきた自由な社会という米国の建国神話を象徴する二十世紀初頭のニューヨークや、デイズニーランド内の西部開拓を再現し表象したテーマパークと並立しているのはなぜなのだろうか。

デイズニーによる歴史実践は、文化の領域からの国家の撤退と私企業による大規模な投資の典型という意味で、新自由主義の潮流に倣差すものであるとともに、複数の土地に根ざした異質な歴史の表象を組み合わせ、ある種の調和を実現している点で、グローバル化の現段階における日本を象徴する営みでもある。しかし、その演出手法を、歴史的な文脈を無視し、異質な要素をつなぎ合わせるポストモダンな企てと規定すればすむというわけではない。そうした歴史実践もまた、参照枠組みとしての過去の歴史実践の系譜を前提とし、そこからの取捨選択に際しては特殊個別的な歴史状況により、規定を受けざるをえないからだ。この歴史実践の系譜を探るとともに、それが現代の日本に接続するにいたった経路について考察することが、本稿の目的となる。以下ではまず、米国におけるラテンアメリカに関する歴史実践の起点に位置するアレクサンダー・フォン・フンボルトの歴史的役割について述べる。次に、フ

ンボルトの遺産―正確には生前贈与であるが―を継承しつつ、マヤ文明を米国民文化史の基層に据えようとしたジョン・ロイド・ステイヴンズの試みを、一九世紀半ばの米国・メキシコ関係の文脈に即しながら分析する。三節では、世紀転換期から二〇世紀前半にかけて活動した二人の歴史家、フレデリック・ジャクソン・ターナーとハーバート・ボルトンの業績を検討することで、ステイヴンズの歴史実践が相反するヴェクトルで展開されていく過程に光を当ててみる。四節では、一九三〇年代以降、連邦政府の支援により本格化したラテンアメリカ地域研究の枠組みの下、とくに八〇年代のラテンアメリカにおける累積債務危機を契機として歴史学が米国を標準として西半球規模で収斂しつつあるというトーマス・スキッドモアの見解に対し、批判的な検討を加えていく。その際、ボルトンの唱えた「西半球歴史学」と、メキシコにおける新たな研究動向を批判のための座標軸とする。九〇年代に入ると、ラテンアメリカをめぐる歴史実践は、米国内外で歴史学や国家という枠を超えて繰り広げられるようになる。メキシコと米国におけるそうした動向を五節で論じた後、「おわりに」では、ラテンアメリカをめぐる歴史実践の歴史と現状との接続がロストリバーデルタの謎を生むことになった経緯を浮き彫りにしたい。

本稿での作業は、米国の〈帝国〉としての歴史とラテンアメリカとの関係、そしてこの関係と不可分な形で繰り広げられる歴史実践の連続性と変容に迫る試みのための素描であることを、あらかじめ断っておく。

一、媒介項としてのフンボルト、またはその憂鬱

ニューヨークとマヤ遺跡を組み合わせるという発想は、一九世紀半ばに中米とメキシコを旅行し、マヤ文明の遺跡を欧米に紹介したジョン・ロイド・ステイヴンズに由来するのだが、その検討に入る前にスペイン領アメリカ植民地と米国を接続する役割を果たしたフンボルトについて見ておこう。

スペイン王室は一八世紀半ば以降、限定的ではあるが、アメリカ植民地の門戸を外国人旅行者に開放する。旅行許可を与えられたのはほとんどの場合、科学・技術の専門家であり、その目的はアメリカ植民地に関する情報の収集にあった。それらの大半は実用的な知識であったが、先スペイン期の古代文明にたいする考古学的な知見が増大し、関心が高まったのもこの時期であった。アステカ王国を例にとろう。一六世紀以来、スペイン人宣教師やクリオーリョ（アメリカ大陸生まれのスペイン人のこと）知識人、インディオ貴族らによる、この王国に関する歴史実践が展開されたが、一七世紀末には停滞してしまふ。一八世紀半ば以降、クリオーリョの間でスペイン本国出身者とは異なる独自のアイデンティティを模索する動きが高まると、知識人たちはふたたびアステカ王国への関心をいだき、新たな歴史実践を積み重ねていく。こうした試みの成果を総合し、ヨーロッパの知識人層に紹介する役割を果たしたのが、外国人旅行者の一人、プロイセンの地理学者アレクサンダー・フォン・フンボルトであった。^③一七九九年から一八〇四年まで南北アメリカ大陸に滞在し、調査・研究に従事した彼は、『新大陸赤道地方紀行』（全三〇巻、

一八〇七―一八四四年）、『ヌエバ・エスパーニャ王国に関する政治的考察』（一八一一年）の刊行により、アメリカ大陸研究の第一人者として大きな影響力をおよぼすこととなる。

そのフンボルトはヨーロッパへ戻るに際し、一八〇四年五月末から一月あまり米国に滞在し、ジェファースン大統領をはじめとする指導者たちと交流を深める。米国は当時、フランスからルイジアナを購入（一八〇三年四月）したものの、新たな領土についてほとんど情報をもっておらず、その境界がどこまで達するのかわからない有様だった。ジェファースンとしては議会に対してルイジアナのもつ開発可能性を説明するためにも、正確な情報の入手が不可欠であった。そのためのルイス・クラーク探検隊を派遣した直後に、スペイン領アメリカ植民地、なかでもルイジアナと国境を接していると信じられていたヌエバ・エスパーニャ植民地（以下、メキシコと呼ぶことにする）に関する豊富なデータを携え、フンボルトが姿を現したのである。

ドイツ啓蒙左派の知識人として自由主義を信奉していたフンボルトは、米国の政治理念、諸制度に共感したこともあり、ジェファースンらの求めに応じ、メキシコで収集した様々な情報を提供する。その中には、メキシコのクリオーリョたちがフンボルトの指導下に作成した詳細な地図も含まれており、国防省はその複製を作成するにおよんだ。こうした情報は、米国によるメキシコ北部の土地に対する領有権の主張につながるとともに、バイクやフレモントらの西部探検に利用されることとなる。米国の指導者層は以後、このフンボルトによる支持と情報提供とい

う過去の出来事を繰り返し活用し、こうした歴史実践を通じて帝国主義的な領土拡大を正当化していく。

たとえば、一八四二年から四四年にかけて西部探検をおこなったチャールズ・フレモントは、「発見」した山脈と川にフンボルトの名を冠すること、その探検事業―それはアメリカ先住民の虐殺をとまなうものであり、フンボルトの賛同を得られるものではなかったが―を正当化しようとしている。また、メキシコ―アメリカ戦争（一八四六―八年）当時、海軍長官を務め、後に米国歴史学の父と呼ばれることとなるジョージ・バンクロフトは、生涯に二度、フンボルトをヨーロッパに訪ねている（一八二〇、四八年）。彼の死後、駐プロイセン公使を務めていた一八六九年には、フンボルト生誕百年記念行事において次のような言葉を残している。「（フンボルトは）つねに若きアメリカの友人であった。・・・彼はとりわけ、カリフォルニアおよび現在わが国の領土となっている太平洋沿岸地方全域がわれわれのものとなることを望んでいた」。

米国におけるフンボルトの存在を利用した歴史実践はしかし、フンボルト自身の米国現代史に関する評価と必ずしも一致していたわけではない。フンボルトはその晩年、米国による西部開拓、「インディアン」の殺戮、メキシコからの領土の獲得といった動きが、その自由主義的な諸制度の墮落につながるのではないかという懸念を持つにおよんだ。⁽⁴⁾ この懸念を歴史実践によって払拭する役割は、ステイヴンズに託されることになる。

二、コロンブスの再来としてのステイヴンズ

一九世紀前半の米国は、一方でヨーロッパ列強による西半球諸国に対する介入をいかに阻止するかという外交課題に直面し、そのためにモンロー主義（一八二三）を掲げ、生まれたばかりのラテンアメリカ諸国の主権を尊重すべきとする立場をとりながら、他方でその一つであるメキシコに対しては帝国主義的政策をとろうとしていた。それが矛盾していることは明白だった。この矛盾こそが、若きジャーナリスト、オサリバンをして、一八四五年、テキサス共和国の併合を正当化するため、米国のアメリカ大陸における領土拡大は神の定めた天命であるという、マニフェスト・デステイニーを打ち出させたものではなかるうか。いずれにせよ、これがあまりに身勝手かつ内向きの発想であり、対外的な説得力を欠いていたのはいうまでもない。ステイヴンズがマヤ文明に出会うのは、モンロー主義とマニフェスト・デステイニーの間の矛盾が顕在化しようとする、こうした歴史状況においてであった。⁽⁵⁾

中近東を訪ねて旅行記を出版し（一八三七年）、文筆家としての地位を確立したステイヴンズは、次の訪問先として中米およびメキシコのユカタン半島に目をつける。一八世紀後半に入ってこの地域を訪ね、古代文明の遺跡や遺物に関する調査・研究をおこなったデル・リオ、デューベ、フンボルトらの著作を通じ、この地域でかつて繁栄したマヤ文明に関心を持つようになっていたのである。

この時期の米国では、旧世界においてポンペイなどの古代遺跡が次々と発掘されているのに、米国にはそうしたモニュメントがないという劣

等感と、文化的独自性に対する願望が相俟って、古代遺跡を探し求める動きが高まっていた。たとえば、一八二二年に創設されたアメリカ好古協会は、米国中西部で発見された土壘に関し、それらがオンタリオ湖南岸で発生し、ミシシッピー川沿いに南下し、メキシコに入るにつれて増加するとともに質を高める現象に着目し、太古の昔、米国領内で発生した文化が人の移動を通じてメキシコに伝播し、古代文明の礎となったという結論を下している。こうした新大陸古代文明に対する米国内での関心の高さもまた、さらなる経済的成功を狙う企業家としてのステイヴンズの選択に影響を与えたことは、想像に難くない。

こうしてステイヴンズは、フンボルトによる歴史実践や米国のアマチュア考古学者のそれを参照しつつ、マヤ文明「発見」の旅に出ることになる。同行者は、ニューヨークでパノラマ館を営んでいたイギリス人建築家フレデリック・キャザーウッドであった。二人は一八三九・四〇年と四一年の二回にわたり、中米連邦とユカタン半島を訪ね、遺跡の発掘・調査、遺物の収集をおこなった。その成果をまとめた二冊の旅行記（一八四一年、四三年）は、ステイヴンズの魅力的な文体とキャザーウッドの精密なイラスト、そして意図的な低い価格設定が相俟って、空前のベストセラーとなる。一冊目は、発売後三ヶ月で二万部が売れたほどであった。その背景には、テキサス共和国のメキシコからの独立戦争、なかでも三六年のアラモの戦いが引き起こしたメキシコに対する興味⁽⁶⁾の増大という要因もあった。

第一回目の旅行に際してステイヴンズは、国務省から中米連邦政府

との交渉を進める特命を与えられるが、到着後まもなく任務を放棄している。その理由は、「ここにはいかなる政府も見出しえない」というものだった。したがってそれ以後の行動は、純粹に一人としてのものであった。にもかかわらず、旅行記において彼は、自らを米国民の代表として表象する。このテクストではそれ以外にも、読者に与える効果を計算し、多様なレトリックが駆使されている。

ステイヴンズの歴史実践を整理してみると、それが、遠い過去に関する二つの仮説と現在に近い過去についての二つの目撃証言から構成されていることが分かる。仮説の第一は、マヤ文明は旧大陸文明の影響を受けることなく、新大陸で独立に発生し、発展を遂げたというもので、第二は、米国中西部のインディアン遺跡群とマヤをふくむメソアメリカ文化圏のそれとは一つの連続体を成しているという主張である。そして目撃者としてはまず、中米連邦には実質的な政府が存在していないし、メキシコも含め、スペイン系住民は遺跡に関して無知・無関心であると証言し、続けて現代のマヤ系住民は遺跡の建設者の末裔ではあるけれども、古代文明の破壊者であるスペイン人による圧制の下、墮落してしまい、いまや遺跡については無知に等しいとする。

これらの過去の出来事の表象を通じてステイヴンズが発信するメッセージは、以下のようなものとなる。イギリスやフランスーその研究者たちは旧大陸からの伝播説をとるーには新大陸文明を調査・研究する権利はなく、また中米連邦やメキシコ政府、さらにはマヤ系住民にもマヤ文明の遺跡を継承する能力が欠けている。ただ米国のみが、自国内のイ

ンディアン文化とメソアメリカ文化の連続性のゆえに、科学の進歩という大義の下、マヤ遺跡の調査・研究そして保存の権利と義務を有している。さらにステイヴンズは、米国がユカタン半島にある失われたマヤ都市の征服に成功したならば、マヤの人々はかつての文化的能力を取り戻し、解放者である米国に感謝することになるだろうとさえいうのだ。

この論理に説得力をもたせるレトリックも巧みであった。たとえば、遺跡・遺物について、メキシコや中米連邦という国名を冠することは避け、「アメリカの」という形容詞を用いることで大陸全体を指すのか、米国を指すのかを曖昧なまま残したうえで、「われわれの」という代名詞を滑り込ませる。また、キャザーウッドは、遺跡に無関心なマヤ系住民の様子と、その内部に入り込もうとしているステイヴンズの対比を強調する構図を採用している。さらにステイヴンズは、科学の進歩を体現する米国のこの地域への介入をスペイン人による征服と区別すべく、自らの企てを、犠牲者を出すことなく新天地を開拓した英雄コロンブス―当時、米国で建国神話の一部となっていた―の業績にたとえるのだ。東京デイズニーシーに建設されたメディテラネアン・ハーバーというテーマパークは、コロンブスの出身地と米国史をつなぐ役割を果たしていることが、ここから読み取れるであろう。

しかし、最も目を引くのは、マヤ遺跡を買い取り、ニューヨーク近郊に移築して博物館を建設するという構想である。この博物館は、米国西部の「滅びゆく」インディアン文化を記録したジョージ・キャトリンのパノラマ展示をも併設する予定であり、マヤ文明とインディアン文化が

一つの連続体として米国文化史の基層を成していることを展示しようというステイヴンズの意図が窺われる。この計画は、遺跡から盗掘してきた遺品の保管場所であったキャザーウッドのパノラマ館の焼失により、実現されることはなかった。しかしそこに、アメリカン・ドリームを求めてやってくる移民が第一歩を踏み出す都市ニューヨーク・キャザーウッド自身がそうした移民の一人であった―とマヤ遺跡、さらにはインディアン「滅亡」の哀史でもある西部開拓史を並列する歴史実践の原型を見出しうることは、もはや明らかだろう。

この鍊金術にも比肩しうる歴史実践を通じてステイヴンズは、神の意思を介在させることなく、対外膨張政策を国内問題に変換することに成功する。それは、モンロー主義とマニフェスト・デスティニーの矛盾を克服する論理を先取りするとともに、米国の国民アイデンティティのなかに古代メソアメリカ文明をとりこむ企てでもあった。植民地期メキシコのクリオリョたちによる独自のアイデンティティ形成のための古代文明をめぐる歴史実践はかくして、フンボルトを媒介とし、ステイヴンズにより転用されるにおよんだといえよう。

そして歴史は、ステイヴンズの歴史実践を模倣するかのようになり、米国によるメキシコ侵略へと向かうことになる。

三、フロンティアか、「西半球歴史学」か

ステイヴンズの歴史実践にはある種の両義性が備わっていた。米国のヨーロッパからの文化的自立を図る企てでありながら、随所でヨーロ

ツパとの比較を行うことで、参照枠組みとしてのヨーロッパの規範性を暗黙のうちに認めてしまうのだ。たとえば、旅行記の豪華装丁本の出版を企画した際、ヨーロッパの出版物の形式を真似ただけでなく、さらにはフンボルトに寄稿を求めている。また、アメリカ・メキシコ戦争の最中、一八四七年に彼のもとを訪ね、この戦争における米国の大義への支持を表明したことも知られている。⁽⁷⁾彼の歴史実践が、米国がまだヨーロッパ列強と肩を並べることができず、大陸国家への変貌すら予断を許さない時点での、その成功を願望もこめて予言するものであったことが、そうした両義性を生んだのではないか。また彼の記述には、この両義性ゆえか、ヨーロッパの読者層を念頭においていたと思われる箇所も散見する。

それと対照的なのが、もはやフロンティアが存在しなくなった一八九三年時点で、このフロンティアこそが米国における個人主義と民主主義を育んだと主張したフレデリック・ジャクソン・ターナーである。

ターナーのフロンティア理論は、中西部から太平洋岸にかけての一帯は、フロンティア＝無人の荒野であったとし、インディアンが存在やスペイン人による植民地支配、それを引き継いだメキシコ国家の痕跡を事実上考慮しない。たとえば、代表的論文「アメリカ史におけるフロンティアの意義」の中で彼は、メキシコに一度も言及していない。西部開拓史は完全に一国史的な枠組みの中で表象されるのだ。直接の継承関係の有無を別に、ターナーによるこうした歴史実践を可能にした前提の一つにステイヴンズの企てがあったことは、まず確実であろう。その

意味でターナーは、ステイヴンズの延長線上に位置している。

しかしながらターナーは、米国がヨーロッパ列強に対する相対的な劣位を克服した状況下、緊急の政治課題となりつつあった東部と西部の対立を強く意識しつつ、西部の視点から米国史を再構築することを試みる。想定された論敵は、いわば東部中心主義史観である。ヨーロッパの歴史学を直輸入し、それを用いて米国の諸制度におけるヨーロッパ史との連続性を強調する東部エリートによる歴史実践こそが問題なのだ。モノロー主義はターナーにおいて国内における地域対立の次元に変換されてしまう。そして彼の歴史実践は、あくまで国内の読者層を対象とし、マニフェスト・デステイニーを事後的に承認するのである。⁽⁸⁾

こうして一九世紀末までの米国の歴史からは、帝国主義的過去が消去される。ところでフロンティア理論の影響は現代にまでおよび、意外なところで顔を出す。たとえば、ネグリとハートによる米国＝非帝国主義的〈帝国〉という図式は、一九世紀を通じての米国によるラテンアメリカに対する帝国主義的実践をたんなる逸脱と片付けてしまう。彼らによれば、一九世紀の米国はフロンティアの存在のゆえに、非帝国主義的〈帝国〉の道を歩んだことになる。この歴史実践の中で、メキシコに対する侵略行為―それがナポレオン三世による軍事介入以上に明白な主権の侵害であったことはいまでもない―は一顧だにされないのだ。⁽⁹⁾

さらに、帝国主義および〈帝国〉からの解放の兆しをハーマン・メルヴィルに読み取ろうとするにいたっては、歴史の皮肉を感じざるを得ない。というのも、メルヴィルは『白鯨』（一八五一年）の中で、彼の分

身ともいわれる登場人物イシュメールに、次のような言葉を語らせているからだ。

「一四九二年において、アメリカ（大陸）ははなれ鯨以外の何であつたろうか？・・・ロシア皇帝にとってポーランドとは何だったのか？トルコにとってギリシャとは？イギリスにとってインドとは？合衆国にとってメキシコとは最終的に何なのだろうか？すべてこれ、はなれ鯨にはかならない」

このせりふからは、はなれ鯨＝無主地としてのメキシコを支配することにより、米国が近い将来、〈帝国〉から帝国主義へと変容するだろうという、メルヴィルの予測を窺うことができる。⁽¹⁰⁾

さて、これほどまでに強烈な磁場を構成するフロンティア理論に対し、一九二〇年代に叛旗をひるがえしたのが、ハーバート・ボルトンであった。米国西部、南西部、南東部および太平洋沿岸地方の歴史に関する一連の研究を通じ、ターナーが無人の荒野であるとした領域は、一六世紀以来スペインによる探検・征服・植民の対象であったこと、いいかえればスペイン領北米植民地にとってのフロンティアであったことに焦点をあて、この経験がスペイン人の間では個人主義も民主主義も生まなかったと主張したのである。⁽¹¹⁾

さらに、ターナーが没した一九三二年、初めて米国外（カナダのトロント）で開催されたアメリカ歴史学会年次総会においてボルトンは、米国史研究が陥りがちな一国的な枠組みをこえたアプローチ、西半球全域をカヴァーする共通の歴史研究の必要性を訴えている。⁽¹²⁾ これは、フラ

ンクリン・ローズヴェルトの善隣外交政策を生み出す歴史状況に規定された、新たな歴史実践の提案であった。この「西半球歴史学」ともいべき歴史実践を明確に定式化するならば、西半球において発信者と受信者、および研究対象が同一の国家内で完結せず、異なる国家、学問的伝統に属する研究者が相互に交流することによってそれまでの国民史＝正史を書き換えてしまうような歴史実践ということになるだろう。しかし、それは夢のまま葬り去られてしまう。

現実にはボルトン個人の営みは、米国史のなかにスペイン領アメリカ植民地支配下にあつた領域の歴史―ターナーによればそこは歴史なき空間とされる―を統合ないし復権するという、限定的な性格を帯びていた。それはある意味、ステイヴンズの試みと共通している。しかし、ステイヴンズが米国民文化史の基層として取り込んだマヤ文明が、二〇世紀に入ると、海外の遺跡として考古学の対象に転化するの⁽¹³⁾と軌を一にして、ボルトンもまた米国内で「われわれ」の歴史ではなく「彼ら」＝スペイン人の歴史を研究する歴史家として分類され、そのささやかな企てすら無害化されて終わる。

一九三〇年代の国際状況下、米国では連邦政府といくつかの民間財団が協力し、地域研究としてのラテンアメリカ研究が始動する。これは、ラテンアメリカに関する歴史実践がいわば準国家営化されつつ、学問的なディシプリンとして制度化され、発展していく起点をなしたという点で画期的であった。⁽¹⁴⁾ しかしそれは、あくまで他者としてのラテンアメリカを問題化し、諸問題を解決するための処方箋を提示するという政策科学

として位置付けられていたがゆえに、米国史研究の本流からは隔離されてしまう。メキシコ史研究に限るならば、それ以後、米国の研究者とメキシコの研究者の間には交流があったものの、それがメキシコ史の枠組みを越えることはなかった。西半球歴史学の夢が現実味を帯びるには、一九八〇年代を待たねばならない。

四、ラテンアメリカ史研究における「歴史の終焉」

西半球歴史学に現実味を与えるきっかけは、一九六〇年代以降の米国—ラテンアメリカ関係にあった。

キューバ革命がラテンアメリカ諸国に波及することを恐れた米国政府は、政策科学としてのラテンアメリカ地域研究に多額の資金を投入する。それは、米国流の学問に裏づけされながら社会を近代化しうる人材を、ラテンアメリカ側に育成する目的も有していた。¹⁵ 米国側に限定すると、政策と歴史研究の間の連関は資金面だけでなく、人的な側面にも及んでいる。ジョン・ジョンソンやロバート・ポタシュといった歴史家たちは、五〇年代、六〇年代に国務省アナリストとしてのキャリアを積んだ後、研究者に転進しているのだ。¹⁶ 結局、米国主導によるラテンアメリカ研究の一元化の試みは、カメロット・プロジェクトに見られるように、限られた成果をあげるにとどまった。

ラテンアメリカをめぐる歴史実践の新たな展開はむしろ、米国の思惑とは反するかたちでその兆しを見せ始める。米国の支援を受けた軍事政権が各国に成立するにつれ、多くの研究者が亡命を余儀なくされ、亡命

先として米国やヨーロッパ、あるいは民政が維持されたメキシコを選んだ。ここに、米国政府の意図とは無関係に、それまで一国史的に遂行されていた歴史実践が相互に交流する場が与えられることとなる。さらに八二年の累積債務危機は、ラテンアメリカ各国の経済に深刻な打撃を与え、研究教育条件の悪化と米国、ヨーロッパへの人材の流出を加速した。

メキシコを例にとろう。一九七〇年代までのメキシコは、一〇年に勃発したメキシコ革命の正当な継承者を自認する、制度的革命党による事実上の一党独裁下におかれていた。この政権は、国家が主導するかたちでの輸入代替工業化を進め、保護貿易政策をとることで経済成長を図るとともに、教育制度の充実によって社会的流動性を高め、貧富の格差の大きいラテンアメリカとしてはかなり大きな中間層を生み出した。他方で制度的革命党は、実質的な民主主義の欠如を覆い隠し、自らの正統性を社会の隅々まで浸透させようとした。正史に基づく国定教科書、周期的に政治儀礼としてとりおこなわれる選挙キャンペーン、祝祭日の式典、大統領の演説、道路や広場・公共建造物の名称変更、それらを報道するマスメディアといった様々な機会・手段が利用され、ナシヨナリスティックな上からの歴史実践が繰り広げられた。これと連動して、歴史学・人類学・考古学に関連する公的高等教育研究機関が整備されていき、研究者の再生産が保障されるとともに、メキシコの独自性を強調する学問的言説が政権の正統性を補強していった。

七〇年代に入るとメキシコはラテンアメリカ内では数少ない民主主義国家となる。経済的な繁栄を維持していたことが、学問的条件が整備さ

れていたのと相俟って、母国での生活が危うくなったか、あるいは帰国できないラテンアメリカ知識人にとり、メキシコを魅力的な選択肢とした。アルゼンチンやグアテマラの歴史家や人類学者らがメキシコの大学や研究機関に移ったことは、研究者レヴェルでは一国的な枠組みを超える発想を生む可能性を秘めていた。¹⁷ 他方で、メキシコ国家と歴史学の間の蜜月時代も、一九六八年の民主化を求める学生運動に対する弾圧をきっかけとしてきしみはじめる。政権に対して批判的な研究者は、たとえば、正統性の源泉となっているメキシコ革命の神話に対して修正をとめる新たな歴史解釈を打ち出すようになる。しかし、そうした修正主義の試みもまた、一国的な枠組みに依拠しつつける点では正史との共犯関係から抜け出せないままであったし、ラテンアメリカ出身者の影響力もきわめて狭い範囲にしか及ばなかった。

メキシコにおける歴史実践と国家の役割に対する根本的な変化の兆しは、一九八二年の累積債務危機を待たねばならなかった。経済ナシヨナリズム政策の破綻と、IMFの提示した新自由主義に立脚した構造調整政策の採用は、制度的革命党による政権の独占に対する不満、さらにはその正統性に対する批判の噴出を招くこととなる。

歴史学との関わりをみると、まず高等教育機関に対する政府支出が大幅に削られることが挙げられる。それを正当化するために政府は、メキシコにおける研究者の生産性の低さを指摘し、米国をモデルとした制度改革の必要性を強調した。これにともない、学問的な歴史実践は、制度面でのアメリカ化を経験することとなる。他方で、「生産性」の高い

研究者、あるいは優秀な学生の間では、国内での研究条件の悪化をきらい、米国の大学に移るケースが増える。そして、マウリシオ・トゥリージョやクラウディオ・ロムニツツのように、米国内のメキシコ史研究者を対象として英語で論文を書くようになる一方で、スペイン語でメキシコの読者に向けて書き続ける営みを通じ、一国的な枠組みで歴史を書くことの限界に気づき、新たな歴史の書法を模索する動きが芽生えつつある。¹⁸

ここで米国に目を転じると、一九六〇、七〇年代を通じ、米国の外交政策の誤りに対する批判の高まりもあり、米国のラテンアメリカ外交に関する歴史研究が、ラテンアメリカ地域研究の枠組みを越えて米国史研究の本流に対し、一定の見直しを迫ることがあった。ところが、九〇年代に入ると冷戦の終結にともない、米国政府のラテンアメリカに対する政治的・戦略的関心が低下していったこともあり、ラテンアメリカ史研究はふたたび孤立していく。本流との交流があったとしてもそれは、基本的に本流からの一方通行的な影響関係にとどまる。にもかかわらず両者を共通して貫いているのは、米国における歴史研究は、イギリスやフランス、ましてやメキシコなどにおけるそれと違い、ナシヨナリズムとは無縁の「科学的」客観性に裏打ちされた歴史学であるという信念なのである。

こうした状況に投げ込まれた一石が、一九九四年に発効した北米自由貿易協定であった。この協定は、それまで「南」＝第三世界の盟主を自認していたメキシコを北米の一部と認定とした。それは、「南」の野蛮

との対比を通じて「北」の文明国家としてのアイデンティティを築いてきた米国と、「北」の帝国主義に対する抵抗をナショナリズムの支柱としてきたメキシコの双方に対し、一国史的な枠組みに立脚した歴史叙述の見直しを迫らざるをえない⁽⁹⁾。しかし、米国史研究本流の反応は、自らの科学的客観性に対する自負のゆえに鈍い。米国におけるラテンアメリカ史研究者の反応にも、この自負が色濃く影を落としている。

たとえば、トーマス・スキッドモアは、二〇世紀後半のラテンアメリカ史研究の動向を、米国とラテンアメリカ双方に目配りしながら論じた末に、次のように結論付ける。冷戦の終結はラテンアメリカにおける歴史研究を脱イデオロギー化した。九〇年代に入ってから米国の交流の増大を通じ、彼らは実証的歴史学の手法を学んでいる。いまや、西半球におけるラテンアメリカ史研究は米国標準に収斂しつつあるのだ、⁽²⁰⁾と。フランス・フクヤマの「歴史の終焉」論をラテンアメリカ史研究に流用したかのようなこの歴史実践の志向が、肝心の米国史の見直しにつながらない以上、ボルトンに胚胎していた西半球歴史学とは似て非なるものであることは、いうまでもない。

私としては、西半球歴史学の可能性は、トゥリージョやロムニッツのような研究者の問いかけに対する米国史研究本流の応答にかかっていると考えるのだが、ここでは最後に、歴史学を離れ、北米自由貿易協定に代表される新自由主義がメキシコにおける歴史実践に与えたインパクトと、歴史実践のせめぎあいが国境を越える様子を考察することにしよう。

五、歴史実践の民営化と越境

すでに触れたように、北米自由貿易協定の発効は、メキシコの国民的アイデンティティを揺るがしかねない出来事であった。制度的革命党の綱領にして国是であったナショナリズム史観によれば、革命前の独裁者ボルフィリオ・ディアスのとった買弁的な経済政策の再現ということになる。しかし、協定の交渉から発効までこの課題の遂行に勢力を注いだカルロス・サリーナス大統領としては、売国奴に近いイメージを後世に残すわけにはいかない。そのためには、正史そのものを修正するしかないであろう。

正史の修正自体は、歴代大統領が繰り返してきた。自らの業績を誇示するために、博物館を新築・改築させたり、研究所を開設したり、記念碑を建立したりすることで、新たな歴史の一ページを記させるとともに、過去の出来事の解釈を少しずつずらしてきたのである。ところが、累積債務危機以後はその方法が変わる。国营企業の民営化や公務員削減といった歳出削減を実施するなか、大統領は公的部門に正史の書き換え作業を依頼することを控えるようになる。それには、たとえば国立自治大学や国立人類学歴史研究所の研究者たちが政府批判を強めていたことも影響したであろう。そこで、一九八二年に就任したデ・ラ・マドリー大統領の場合は、雑誌『ブエルタ』に拠っていた文化人グループを重用し、正史の修正作業を彼らに外部委託したのである。

サリーナスとしては、前任者のスタッフを受け継ぐつもりはなかつ

た。ラディカルな改革者として自らを演出するには、それ以前の政権との断絶を強調する必要があった。そこで彼は、『ブエルタ』と対抗関係にあった雑誌『ネクスス』に集う文化人グループを登用し、修正作業にあたらせた。その成果が、一九九二年の国定歴史教科書の改訂であった。改訂の内容およびそれをめぐる論争については山崎眞次の紹介があるので詳説しない。スペイン人による征服・植民地支配、独立戦争、一九世紀の内戦と対外戦争、ディアス独裁、メキシコ革命といった出来事の再解釈、そこに登場する英雄たちの再評価が遂行され、その延長線上でサリーナスの業績が肯定的に捉えられるように書き換えられたことを確認しておけばよい。⁽²¹⁾

ここで問題にしたいのは、正史をめぐるせめぎあいが主としてマスメディアにおいて展開した点である。これは、比喩的というならば、歴史実践が民営化され、個々のヴァージョンが商品化されることを意味した。たとえば、『ブエルタ』グループの指導的存在であるエンリケ・クラウセは、テレビサというテレビ局に出資し、ディアスの一生を描いたテレビドラマの制作に関わるとともに、出版社クリオを創業する。それに対し、『ネクスス』を率いるエクトル・アギラル・カミンは、国営テレビのカナル22を掌握しただけでなく、出版社カル・イ・アレーナを創設した。そしていずれのグループも、メキシコ国内だけでなく、国外においてもメキシコ国民の真の声を代表しているとして競い合うにおよんだ。

国外における正史の表象という点ではクラウセがリードした。テレビ

サはラテンアメリカ全域、米国、ヨーロッパにおよぶネットワークを有し、彼の制作したドラマはやすやすと国境を越えたのである。また、彼の後ろ盾であるノーベル賞作家オクタビオ・パスの威光もあってか、歴代大統領の事績を編年体で叙述した著作『権力の伝記』の英語版をニューヨークのハーパー・コリンズ出版社から刊行することに成功している。⁽²²⁾ こうしてメキシコの正史をめぐる歴史実践は、私企業を担い手とすることで、容易に国境を越えて闘われることになる。従来、正史の生産を担っていた公的研究機関が、グローバルな市場に向けての歴史実践の発信に適さないがゆえに民営化を迫られているのは、メキシコをめぐる歴史の生産の新しい局面を象徴しているといえよう。

ところで、民営化＝商品化された歴史実践は特定の政権を公式に代表しているわけではないがゆえに、他国におけるそれと接続しやすい。歴史学との一つの違いはそこにある。メキシコの場合それは、米国における歴史実践と接続していく。両者を媒介するのは、二〇世紀初頭以来の、メキシコから米国への移民の流れ＝越境体験である。

西部開拓史上、米国国民の関心を引いた最大の出来事の一つが一八三六年のアラモの戦いであることに異論はないだろう。メキシコ領テキサスに移住してきたアングロサクソン系入植者たちが、メキシコ政府による「圧制」に抵抗して武装蜂起したのが三五年のこと。開拓史上の伝説的英雄デイヴィッド・クロケットらが義勇兵としてテキサスに入り、地元住民とともにアラモの砦に立てこもる。三六年三月、砦は大統領サンタアナ率いるメキシコ軍に攻囲され、クロケットをはじめとする守備隊

は全員戦死した、というのがテキサスおよび米国における正史の伝えるところである。そのおよそ一ヶ月後、サンハシントにおいてメキシコ軍を撃破し、サンタアナを捕虜としたサム・ヒューストン率いるテキサス軍は、「アラモを忘れるな!」を合言葉に戦ったという。アラモの戦いは発生してからこれだけ短期間に、歴史実践の対象となったのであり、その後も米国民の歴史的想像力を魅了しつづける。

米国ではしばしば、歴史実践は連邦政府ではなく、個人や企業、あるいは任意団体によって遂行される。それが正史であつても事情は変わらない。ラテンアメリカをめぐる歴史実践との絡みでは、地域研究が準国営化されていた時代から、それが再民営化される時代へと転換しつつある⁽²³⁾。留意すべきは、この民営化が、米国とラテンアメリカの境界に関する従来の見方を変える契機を孕んでいる点である。そうした観点から、アラモをめぐる歴史実践の変化を捉えておこう。

アラモの戦いはすでにハリウッドで二度映画化されている。一度目は、一九六〇年に公開されたジョン・ウェイン監督・主演の『アラモ』であつた。そこでは、主人公デイヴィッド・クロケットと彼を取り巻く砦の守備隊の人々が、個性をもったキャラクターとして造形されている。観客は、そうしたキャラクターに感情移入することで、彼らの視点からアラモの戦いを追体験できるように工夫されているのだ。それに対し、メキシコ軍の兵士や将校については、彼らにないしあちら側の存在であることを示す、いわば記号として描かれるにすぎない。わずかに、大統領サンタアナだけが、それと分かる形で書き込まれている。

それに対し、二〇〇四年に公開されたタッチストーン・ピクチャーズ製作のリメイク版『アラモ』は、メキシコ軍兵士の従軍日記という当時の歴史実践を起点として進展した歴史研究の成果に依拠しながら、テキサス共和国のメキシコからの独立戦争におけるこの出来事に、新たな光をあてようとしたという。その結果、旧作では戦死を遂げたはずのクロケットが捕虜となり、サンタアナの前で跪いて命乞いをするシーンなどが盛り込まれたのである。

二〇〇三年秋、この新作が試写されると、メキシコ側の視点を尊重しすぎているという批判の声が、アングロ系白人を中心にわきあがり、インターネットを通じた抗議キャンペーンが盛り上がった。こうした状況下、製作側は追加の撮影と新たな編集作業を余儀なくされる。公式発表ではキャンペーンとは無関係な決定であるということであつたが、批判をかわすためであつたことは、誰の目にも明らかだつた。事の経緯が『ニューヨーク・タイムズ』で報道されると、それはすぐにメキシコの日刊紙『ラ・ホルナダ』でもとりあげられ、波紋は国境を越えた。

この歴史実践をめぐる騒動は、米国内におけるメキシコ系アメリカ人が無視しうるマイノリティの地位を脱し、政治や経済における発言力を増大させたことが、広く米国社会で認識されていることを示している。近年の大統領選挙においてキヤスティング・ボードを握っている大票田が、カリフォルニア、テキサス、フロリダといった、メキシコ系アメリカ人を含むいわゆるヒスパニック系人口の集中する州であることは、彼らの政治力の上昇を物語る。一九七四年、当時の司法長官が一〇〇万人

の不法移民を叩き出すと述べたとき、その念頭にあったのはメキシコ人移民であつたが、現ブッシュ政権において不法移民を取り締まる司法長官のポストに就いているのは、メキシコ系アメリカ人なのだ。

また経済面では、ヒスパニックの人口増加率は高いうえに、消費意欲が旺盛なため、企業としてはヒスパニック市場に注目せざるをえない。

今回、タッチストーン社が、メキシコ系アメリカ人も感情移入できる脚本を採用したのは、彼らを動員するためのマーケティング戦略の一環であつたと考えられる。その計算の背景には、一九九〇年以後、メキシコ系アメリカ人やメキシコ人の製作した映画—その中には歴史物が少なからず含まれている—が、非メキシコ系の観客をも動員して予想外の成功をおさめてきたという事情もあつたであろう。いふなれば、ヒスパニックの歴史実践の積み重ねを前提として、リメイク版『アラモ』という歴史実践が遂行されたわけである。

他方でこの騒動は、ヒスパニックの台頭を快く思わないアングロ系保守派の危機感を浮き彫りにした。「史実に忠実な映画づくり」—これは配給会社のキャッチコピーでもある—は、受信者としてヒスパニックを想定したがゆえに、西部開拓史がたんなる国内問題ではなく、米国による帝国主義的領土拡大の歴史でもあつたことを、観客に突きつける。この反ステイヴンズ、反ターナー的な歴史実践は、米国—メキシコ間の国境線の人為性—それは神が引いたものではない!—を明るみに出す。北米自由貿易協定発効後の状況下、メキシコ側に政治的に利用されるときそれは、米国による不法移民の侵入を防ぐための諸措置の不当性を導

くための論拠ともなりうるのだ。それゆえに保守派の人々は、ハリウッド資本による反—正史的な歴史実践を脅威と受け止め、いわば正史を守るためにインターネットを通じて反対運動を繰り広げたのであろう。

国境線に沿って分断されていた歴史がマスメディアを通じて再び共有されるとき、共有された歴史をめぐる歴史実践が、きわめて強力な政治的磁場にさらされること、そしてスキッドモアの予定調和を破壊しかねないことを、このエピソードは教えてくれる。

しかしながら、非ヒスパニック系の映画制作者が、どこまで自覚的であつたかは別として—試写版へのアクセスが出来ない以上、確認のしようがない—、西部開拓史における正史を修正しようとしたこの歴史実践は、歴史学の外部における西半球歴史学に向けての一步といえるのではないだろうか。

おわりに—イシューメールのつぶやき

最後に、デイズニーシーにおける歴史実践を可能にした歴史状況と、歴史実践の接続について考えておくことにしよう。

メキシコにおける新自由主義の展開はいま、文化財の民営化にまで及ぼうとしている。『ラ・ホルナーダ』(二〇〇五年八月七日)によれば、現在、議会では文化財保護法の改正案が審議中だが、その内容をめぐって批判の声が高まっているという。しかし、この法改正の動きは民営化プロセスの総仕上げにすぎず、文化財の観光資源としての「有効」利用はすでに個別に実施されてきた。

たとえば、メキシコを代表する古代遺跡の一つオティワカンでは、保存地区に隣接して外資系リゾートホテル、スーパーマーケットの建設が許可されてきた。また、マヤ文明の遺跡が集中するユカタン半島の東海岸に位置するイシュカレでは、国際的ビーチリゾート、カンクンからのアクセスの良さを活かし、テーマパークが建設され、人気を呼んでいる。美しいビーチで遊んだあとは、メキシコの歴史と文化に触れることができる。野外劇場ではメキシコ各地の民族舞踊が披露され、復元された球戯場では古代マヤ人がおこなっていたとされる球技が演じられる。そして園内には古代マヤ遺跡―それは本来、国民の財産として国立人類学歴史学研究所の管理下に置かれるべきものである―があり、正史の演出に信憑性を付与する役割を果たす・・・それはメキシコ国民文化のいわばパッケージとして、そっくりそのまま輸出可能なユニットである。

ところでデイズニーシーの開業時、米国はアメリカ大陸全域を包摂するアメリカ自由貿易地域構想の実現に向け、外交努力を重ねていた。その同じ時期、ヨーロッパ連合は、メキシコを含むラテンアメリカ諸国との自由貿易協定交渉を進めており、この地域がいずれの影響下に置かれるのかは予断を許さない状況であった。EU陣営は、かつての宗主国スペインを通じ、同一文化圏にあるラテンアメリカとの経済上の友好関係が歴史的な絆に基づくものであると主張する。一九九二年にセビリヤで開催された、アメリカ大陸「発見」五〇〇周年を記念する万国博覧会では、そのような主張を体現した歴史実践であり、メキシコ館はマルチメディア版の正史を展示したのである。⁽²⁴⁾

この二重の文脈の中でデイズニーシーにおける歴史実践を捉え直してみよう。まずメディテラネアン・ハーバーは、コロンプスによるアメリカ大陸「発見」を、米国史に取り込むための装置である。一方、ロストリバーデルタは、イシュカレというユニットを輸入し、演出し直したものであることが見えてくる。さらに、そのユニットを二〇世紀初頭のニューヨークと並列して展示するという歴史実践が、アメリカ大陸全域を米国の経済的影響下におくという米国の経済戦略に対し、国家としてのアメリカと大陸としてのアメリカ（より正確には中央アメリカ）を意図的に混同することで、歴史的正当性を付与する機能を担わされていることが、理解されるだろう。それはセビリヤ万博に対抗し、モンロー主義とマニフェスト・デスティニーの矛盾を現代において止揚しようするために構築された表象なのだ。そのために、ステイヴンズの歴史実践が再利用されたのだとすれば、きわめて妥当な選択だったといえる。

また、この歴史実践が、国家ではなく一私企業によって遂行された点でも、ステイヴンズのそれを彷彿とさせる。ステイヴンズはこの企てを通じ、米国の国益だけでなく、個人の利益も追求しようとしたからである。その構想は、百年早いテーマパークの建設だったといっても過言ではない。さらにいえば、一九三〇年代の中米の古代遺跡という年代設定も、偶然の結果とばかりはいえないだろう。それは、ボルトンが西半球歴史学を構想し、ローズヴェルトが善隣外交を通じてのアメリカ大陸諸国の結束を呼びかけ、ラテンアメリカ地域研究がスタートした時代と一致している。米国人研究者によるユカタン半島での大規模なフイー

ルド・ワークーインデイ・ジョーンズがその一員であったとしても不自然ではない―が展開されたのもこの時期なのだから。⁽²⁵⁾

にもかかわらず、東京デイズニーシーにおける歴史実践を、米国とラテンアメリカをめぐるそののたんなる延長線上で理解することを阻害しているのは、それが米国でもメキシコでもなく、この日本において遂行されたという事実である。メッセージの発信者も、想定される受信者も、表象されている歴史、土地とは直接関係がないという状況は、日本という国民国家の枠組みを前提としたならば、きわめて奇異な話である。商品化された歴史実践が容易に越境するのは事実だとしても。本来、ターナー的な祝祭空間であるはずのデイズニーランドに、ステイ・ヴンズ的な歴史実践を接木したのがほかならぬ日本においてなのだから。

歴史実践が環太平洋レヴェルで接続してしまうこの状況を、日本におけるアメリカ化の一面面にすぎないと片付けてしまうのでも、十分な解答ではないだろう。おそらくそこには、〈帝国〉の変容という問題系からんでいるのだが、いまの私には明確な答えを与える用意はない。問題の複雑さを前に立ち尽くすしかない私の脳裏には、ただイシユメールの言葉がリフレインされるのみである。

「人間の権利とか自由とかは、「はなれ鯨」ではなくて何であろうか?・・・この大いなる地球そのものは、「はなれ鯨」ではなくて何であろうか?とここで読者諸氏よ、諸君自身は、「はなれ鯨」⁽²⁶⁾にして「しとめ鯨」でなくて何でありましょうか?」

註

(1) 保莉実『ラディカル・オール・ヒストリー・オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶ノ水書房、二〇〇四年、一九―二二、四八―五二頁。

(2) 潜水艦ノーチラス号による旅をテーマとした「海底二万マイル」の導入がその典型であろう。東京デイズニーランド開業時、運営会社が日本における原子力潜水艦に対するアレルギーを考慮し、このアトラクションを不採用としたことを考えると、隔世の感を禁じえない。栗田房穂・高成田亨『デイズニーランドの経済学』朝日新聞社、一九八四年、一八頁。

(3) 安村直己「クリオリーヨ・啓蒙・ナショナリズム―一八世紀スペイン帝国における言説のせめぎあい」樺山紘一他編『岩波講座世界歴史一六―主権国家と啓蒙』一九九九年、一二三―四三頁。

(4) フンボルトと米国の関係についての記述は「Ortega y Medina, Juan A., "Estudio preliminar" en Alejandro de Humboldt, *Ensayo político sobre el reino de la Nueva España*, México, Porrúa, pp.IX-LIII による。なお、ルイス・クラーク探検については、明石紀雄『ルイス・クラーク探検―アメリカ西部開拓の原初物語』世界思想社、二〇〇四年を参照。

(5) 以下の記述はおおむね「Evans, R. Tripp, *Romancing the Maya: Mexican Antiquity in the American Imagination, 1820-1915*, Austin, University of Texas Press, 2004, chap.1 に依拠している。ただしエヴァンズは「モンロー主義の延長線上にマニフェスト・デステイニーを位置づけており、両者の間の矛盾を見ようとしなない。その結果、ステイ・ヴンズの歴史実践の重要性を十分には捉え切れていない。

(6) 一八三六年のアラモの戦いが、当時、さらにはその後の米国において様々な歴史実践を生み出し続けている点については「Trouillot, Michel-Rolph,

Silencing the Past: Power and the Production of History, Boston, Beacon Press, 1995, pp.1-30 を参照。

(7) Evans, op.cit., pp.76, 85.

(8) ターナー、E.J.『アメリカ史における境界』(松本政治他訳) 北星堂書店、一九七三年、五一四二頁。ちなみにこの本の中でメキシコに言及しているのは、一九一四年の講演のみであり、それは米国国境地帯へのメキシコからの侵略の脅威という文脈においてであった！

(9) ネグリ、アントニオ&マイケル・ハート『帝国』一グローバル化の世界秩序とマルチチュード』(水嶋一憲他訳) 以文社、二〇〇三年、二〇九一六七頁。

(10) メルヴィル、ハーマン『白鯨』(八木敏雄訳)、岩波文庫、二〇〇四年、中、四六七頁。メルヴィルがここで、マニフェスト・デステイニーに対する支持を表明しているのか、あるいは皮肉にくるんだ批判の矢を放っているのかについては、異なる立場が存在する。前者の例としては巽孝之『白鯨』アメリカン・スタディーズ』みすず書房、二〇〇五年、一章を、後者の例としては牧野有通『世界を覆う白い幻影—メルヴィルとアメリカ・アイデオロジー』南雲堂、一九九六年、二章を参照。

(11) Bolton, Herbert, *The Spanish Borderlands: A Chronicle of Old Florida and the Southwest*, New Haven, Yale University Press, 1921.

(12) Trillo, Mauricio Tenorio, *De cómo ignorar*, México, FCE, 2000, p.58.

(13) Evans, op.cit., p.5.

(14) De la Peña, Guillermo, "Los estudios regionales y la antropología social en México" en Pedro Pérez Herrero (compilador), *Región e historia en México (1700-1850)*, México, Instituto Mora, 1991, pp.123-162.

(15) その典型は、米国防省および陸軍が推進しようとしたカメロット・プロ

フンボルトから『アラモ』まで—ラテンアメリカをめぐる歴史実践の系譜と新自由主義

ジェクトに見られる。山口昌男によればそれは、ラテンアメリカの人文・社会科学系の研究者を自由主義擁護の大義のために動員する試みであり、そのために四年間で総額六億ドルの予算が組まれていたという。このプロジェクトは結局、ノルウェー人研究者による批判が公表されるとともに、ラテンアメリカ諸国の研究者からの反発を招くこととなり、国防長官によってキャンセルされた。山口昌男「人類学的調査について—帝国主義と人類学」『人類学的思考』筑摩書房、一九九〇年(初出は一九六七年)、七三—七六頁。

(16) Skidmore, Thomas, "Studying the History of Latin America: A Case of Hemispheric Convergence" in *Latin American Research Review*, vol.33-2, 1998, pp.107-111.

(17) アルゼンチンのカルロス・センパ・アサドウリアンやネストル・ガルシア・カンクリーニ、グアテマラのベルナルド・ガルシア・マルティネスやセペロ・マルティネス・ペラエスなどの名前がすぐに思い浮かぶ。この時期のラテンアメリカ諸国間の比較史的なアプローチの成果としては、Batra, Roger, ed., *El modo de producción asiático: Problemas de los países coloniales*, México, Era, 1969; Florescano, Enrique, compil., *Ensayos sobre el desarrollo económico de México y América Latina(1500-1975)*, México, Fondo de Cultura Económica, 1979; Florescano, E., coord., *Orígenes y desarrollo de la bungeesía en América Latina, 1700-1955*, México, Nueva Imagen, 1985 などが挙げられる。

(18) Trillo, op.cit. & Lomnitz, Claudio, *Deep Mexico, Silent Mexico. An Anthropology of Nationalism*, Minneapolis, University of Minnesota Press, 2000 などが挙げられる。彼らに共通しているのは、史学史と知識人論というアプローチである。

- (19) Trillo, op.cit., pp.48-58.
- (20) Skidmore, Thomas, "Studying the History of Latin America: A Case of Hemispheric Convergence" in *Latin American Research Review*, vol.33-2, 1998, pp.105-128.
- (21) 山崎眞次『メキシコ民族の誇りと闘い―多民族共存社会のナショナリズム形成史』新評論、二〇〇四年、九章。
- (22) Lomnitz, op.cit., chap.10. なお現在では、正史をめぐる闘いは歴史小説の分野に飛び火している。この点については、Hernández López, Conrado (coord.), *Historia y novela histórica*, Zamora, Colegio de Michoacán, 2004 を参照。
- (23) 民営化が全面的に進んでいるともいえない。テッサ・モリス・スズキによれば、一九九八年、米軍ランド・アロヨ・センターは『メキシコにおけるサバティスタの「社会的ネット戦争」』という報告書を公開している。その資金は陸軍情報担当副参謀長室が拠出したという。「NGOにたいするイエスとノー…生きられた政治の世界」『思想』九三三号、二〇〇二年、二二四―二二五頁。このカメロット・プロジェクトの縮小版が示すように、米国の連邦諸機関は地域研究としてのラテンアメリカ研究への支援を停止したわけではない。
- (24) Trillo, op.cit. cap.1.
- (25) ローズヴェルトはユカタン半島に関し、ドイツやイタリアの航空機が米国土土に到達するための中継地になりうるといふ懸念を表明していた。高田馨里「第二次大戦期、アメリカ合衆国における「新しい世界観」の広がり」『歴史学研究』七五九号（二〇〇二年五月）、二〇頁。
- (26) メルヴィル前掲書、四六七頁。

〔付記〕本稿は当初、ある論文集のために執筆したもので、二〇〇五年十二月には脱稿していた。その後、諸般の事情により、論文集の出版計画は中止となった。今回、本誌に掲載するにあたっては、脱稿時よりすでに三年以上が経過していることもあり、内容を修正することも考えたが、結局、最低限の字句の訂正にとどめることにした。本稿中、「現在」とある場合、二〇〇五年を意味している点に、留意していただきたい。